

「肝 臓」—構造・機能・病態生理—

改 訂 第 2 版

監修 高 橋 忠 雄 慈恵大教授
編集 三 浦 義 彰 千葉大教授
齋 藤 守 東京大教授
織 田 敏 次 東大助教授

東京女子医科大消化器内科

竹 本 忠 良

たいへん意地のわるい指名をうけたものである。消化管の診断学を勉強している自分に「肝臓」のしかも基礎的な本の書評をせよということである。

ひとつこの機会にと思って約1週間かけてこの本と取組んでみた。門外漢であるが、読んで頭が痛くなることもなかったし、たいへん面白く、読んでよかったと思っている。ちょうど乾燥しきった砂漠にスコールが長時間続いたような思いがした。当分の間は砂地もしめっているだろうと期待できる。

この本は1964年に第1版がだされ肝臓病学に関する基礎的知識を集大成したものとしてたいへんな好評を受けた。今回の改版は初版よりもさらに基礎的な方面を充実させたもので、近く臨床編として刊行される「肝臓病」と対をなす予定である。

最近の消化器病学の進歩はまこと

に急速で、ますます専門分化が進んでいる。一昔前までは消化器病学会ひとつでことたりたものが、現在では御本尊の消化器病学会のほかに、肝臓学会、内視鏡学会、胃集検学会、消化器外科学会、等があり、そのほか研究会に至っては正確な数すらつかめない。

こうした急激な分化は学問の進歩の必然性の一面を端的に示しているのであるが、現状としては総合が困難になってしまっている。消化器病学会などでは消化管を勉強している人と肝臓専門の人とでは共通な対話が不可能になってしまっており、学会場のテーマが消化管から肝に変わると、会員の移動がきわだっている。

こういう現実を前に、本書は消化管を勉強している人にも必読の書としておすすめしたい。内容は編者が第2版の序文に書かれているように「これこそ1970年代の肝臓学の最高

の書であるという、自負の念を禁じ得ない」ものであって、この大著をここまで成長させられた監修者、編集者の手腕と48人の執筆者の御努力に深く敬意を表したい。

この本に盛りこまれている、肝の構造、機能および病態生理を理解していないと、消化器病学会などでもテーマが肝の部に入ると、なにが論ぜられているかさっぱりわからなかったり、舟を漕ぐことになる。

そうした消化器病学の大きな断裂をすこしでもうめてゆくためにも、本書は少なくとも消化器病学を専攻している人に広く読まれるべきであると考え、近刊予定の「肝臓病」の完成を心まちするものである。

(B5・頁824・図236・原色図4・
¥ 19,000・¥200)